

市原市小鳥向遺跡Ⅲ

—小鳥向遺跡第5地点—

2012

社会福祉法人 三和会
市原市教育委員会

序 文

市原市は千葉県ほぼ中央に位置し、養老川が形成した肥沃な平野から、標高300mに近い丘陵部まで変化に富んだ地勢を有します。こうした市原の、市内各所に残された遺構・遺物は、かつてこの地に暮らした人々の具体像を私たちに教えてくれます。

今年度、牛久所在の石奈坂古墳から銅鏡や勾玉、三輪玉、鉄剣など豊富な副葬品が出土し、新聞等で広く報道されましたが、これらも祖先が残した足跡のひとつです。

本報告書は、特別養護老人ホーム建設に先立ち、発掘調査を行った小鳥向遺跡の調査成果をまとめたものです。新堀鋳物師の存在を裏付けたこれまでの資料に加え、弥生時代の墓域が新たに発見されました。

このような発掘調査によって得られた成果が、将来にわたり活用され地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書の刊行までの間、御指導と御協力を賜りました社会福祉法人三和会、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関ならびに関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

市原市教育委員会
教育長 山崎正夫

例 言

- 1 本報告書は、千葉県市原市新堀字小鳥向943-1，944に所在する小鳥向遺跡第5地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業、報告書刊行は社会福祉法人三和会が計画した特別養護老人ホーム建設に先立ち、同法人の依頼を受けた市原市教育委員会 埋蔵文化財調査センターが千葉県教育委員会の指導にもとづき実施した。
- 3 発掘調査は以下のとおりに行った。

確認調査 (118㎡/1,181㎡)	調査期間	平成23年3月1日～同年3月15日
	担 当	高橋康男
本調査 (238㎡ 後に284㎡に拡張)	調査期間	平成23年5月19日～同年6月7日
	担 当	北見一弘
整理作業	期 間	平成24年1月6日～同年2月14日
	担 当	北見一弘
- 4 本報告書の執筆・編集は北見一弘が行った。
- 5 本書に収録した調査記録や出土遺物等は、市原市教育委員会ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

凡 例

- 1 遺構の略号は、千葉県教育委員会の「千葉県埋蔵文化財発掘調査標準」にもとづき、SK：土坑・土壇、SE：井戸、SH：ピット（群）、SS：方形周溝墓、SD：溝としている。また、遺物の計測部位もこれに準拠している。
- 2 遺構、遺物の挿図の縮尺は、方形周溝墓が1/100、土坑・土壇が1/80、土製品・石器・金属製品・鑄造関連遺物が1/2を基本とした。
- 3 方位は座標北としている。
- 4 グリッドは『市原市小鳥向遺跡』2002 財団法人 市原市文化財センター発行で使用したものを基準としている。
- 5 遺構断面図のうち、セクションポイントに隣接する位置の数字は海拔を示す。
- 6 遺構内における遺物出土位置の表記は以下のとおりとする。

土器	石器	金属製品・鑄造関連遺物
----	----	-------------
- 7 遺構面積はウチダデジタルプランメーターKP-90を使用し、実測図より測定した。
- 8 鑄造関連遺物のメタル度は埋蔵文化財用特殊金属探知機MR-50Bを使用して測定した。
- 9 遺物観察表における色調は『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社発行及び『新配色カード 199a』日本色研事業株式会社発行に準拠して記載している。
- 10 実測図中のスクリーントーンの説明は以下のとおり。



擦れ



錆



釉



ガラス質

本文目次

序文	
例言 凡例	
本文目次・挿図目次・表目次・図版目次	
第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の成果	1
第1節 調査の方法	1
第2節 遺構と遺物	1
第3節 鋳造関連遺物	16
第3章 総括	18

挿図目次

Fig. 1 小鳥向遺跡位置図	2
Fig. 2 小鳥向遺跡周辺地形図	2
Fig. 3 小鳥向遺跡遺構分布図	3
Fig. 4 小鳥向遺跡第5地点全体図	4
Fig. 5 SS-1・2・3全体図	6
Fig. 6 SS-1・2平面図・断面図	7
Fig. 7 SS-3平面図・断面図	8
Fig. 8 A-1区遺構平面図・断面図、遺物実測図	9
Fig. 9 A-2区遺構平面図・断面図、遺物実測図	10
Fig.10 A-3区遺構平面図・断面図	11
Fig.11 SD-2平面図・断面図	12
Fig.12 B区遺構平面図・断面図、遺物実測図	13
Fig.13 SK-11・12・15、遺構外出土遺物実測図	14
Fig.14 鉄製品・鋳造関連遺物実測図	15

表目次

Tab.1 遺構一覧表	
Tab.2 遺物観察表	19

図版目次

PL.1 遺構写真(1)	
PL.2 遺構写真(2)	
PL.3 遺物写真(1)	
PL.4 遺物写真(2)	

Tab.1 遺構一覧表

掲載番号		遺構種	調査時			時期	備考
略号	遺構		略号	遺構 No.	枝番		
SS	1	方形周溝墓	SS	1	-	弥生時代中期	
SS	2	方形周溝墓	SS	2	-	弥生時代中期	
SS	3	方形周溝墓	SS	3	-	弥生時代中期	
SK	1	土坑	SK	1	-		
SK	2	土坑	SK	2	-		
SK	3	土坑	SK	3	-		
SK	4	土坑	SK	4	-		
SK	5	土坑	SK	5	-		
SK	6	土坑			-		
SK	7	土坑	SK	7	-		SK-8 より新
SK	8	土坑	SK	8	-		SK-7 より古、SE-1 より古
SK	9	土坑	SK	9	-	弥生時代中期	
SK	10	土坑	SK	10	-		
SK	11	土坑	SK	11	a		
SK	12	土坑	SK	11	b		
SK	13	土坑	SK	12	-		
SK	14	土坑	SK	13	-		
SK	15	土坑	SK	14	-		
SK	16	土坑	SK	15	-		
SE	1	井戸跡	SE	1	-		SK-8 より新
SH	1	ピット	SH	1	-		
SH	2	ピット	SH	2	-		
SH	3	ピット	SH	3	-		
SH	4	ピット	SH	4	-		
SH	5	ピット	SH	5	-		
SH	6	ピット	SH	6	-		
SH	7	ピット	SH	7	-		
SH	8	ピット	SH	8	-		
SH	9	ピット	SH	9	-		
SH	10	ピット	SH	10	-		
SH	11	ピット	SH	11	-		
SH	12	ピット	SH	12	-		
SH	13	ピット	SH	13	-		
SH	14	ピット	SH	14	-		
SH	15	ピット	SH	15	-		
SH	16	ピット	SH	16	-		
SH	17	ピット	SH	17	-		
SD	1	溝跡	SD	1	-	15c 前半	
SD	2	溝跡	SD	2	-	中世以前	
SX	1	その他	SX	1	-		
SX	2	その他	SX	2	-		

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、平成22年12月27日付けで 社会福祉法人三和会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事についての届出」が市原市教育委員会よりあり、このことについて協議を行なった結果、千葉県教育委員会から工事着手前に発掘調査が必要との判断がなされたことを契機とする。これを受け市原市教育委員会が平成23年3月1日から同年3月15日に小鳥向遺跡第5地点として対象面積1,181㎡を確認調査し、中世の溝・土坑を検出している。この調査結果から、工事範囲内の238㎡について遺跡が破壊されるおそれがあることが判明したため、平成23年5月19日から同年6月7日までの期間で市原市教育委員会が本調査を実施することとなった。

第2節 遺跡の位置と環境

小鳥向遺跡は、市原市新堀943番地1及び944番地に所在する。遺跡の立地する周辺は養老川中流～下流域右岸の標高22m程の河岸段丘上になる。南から西方にかけて水田のある沖積地に面し、北側には標高差40m以上の台地が広がる。遺跡周辺の調査事例としては、叶台遺跡、福増山ノ神遺跡、武士遺跡などがあるが、詳細はこれまでの小鳥向遺跡の報文を参照されたい。新しい調査事例としては北方0.5kmで小ノ台遺跡を調査し、古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落跡を検出している（牧野2010）。

小鳥向遺跡はこれまでに4地点の発掘調査を実施し（Fig.2）古墳時代前期、平安時代、中世の遺構を検出している。中でも中世の遺物中に鉄滓や銅滓、鋳型、熔解炉の炉壁片等が出土したことは、金沢文庫文書「上総国新堀郷給主得分注文」に見られる新堀鋳物師の存在を裏付ける資料として評価されているが（北見2000）（櫻井2002）鋳造が行われた場所を示す遺構は検出されておらず、また性格が判明しない遺構が少なからず存在し、遺跡の理解を難しくしている。平成23年度は第5地点南側で、第6地点の調査が進められている（2012.2現在）。

第2章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査は、平成22年度実施の確認調査トレンチを遺構確認面まで重機によって拡張しながら表土を除去し遺構を検出した。なお、これにより付与した遺構番号の一部は整理報告段階で変更している（Tab.1）。また、前述のとおり当初の本調査範囲238㎡の調査中に範囲外への遺構の広がりを確認し、協議により本調査範囲の拡張が決まったが、調査を円滑に進めることを重視し、一度当初範囲（A区）の調査を終了してから継続して拡張範囲の46㎡（B区）を実施している。

第2節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

この時代の遺構は方形周溝墓3基と土坑1基を検出している。土坑については覆土の様相が方形周



Fig.1 小鳥向遺跡位置図 (1/50,000)



Fig.2 小鳥向遺跡周辺地形図 (1/5,000)

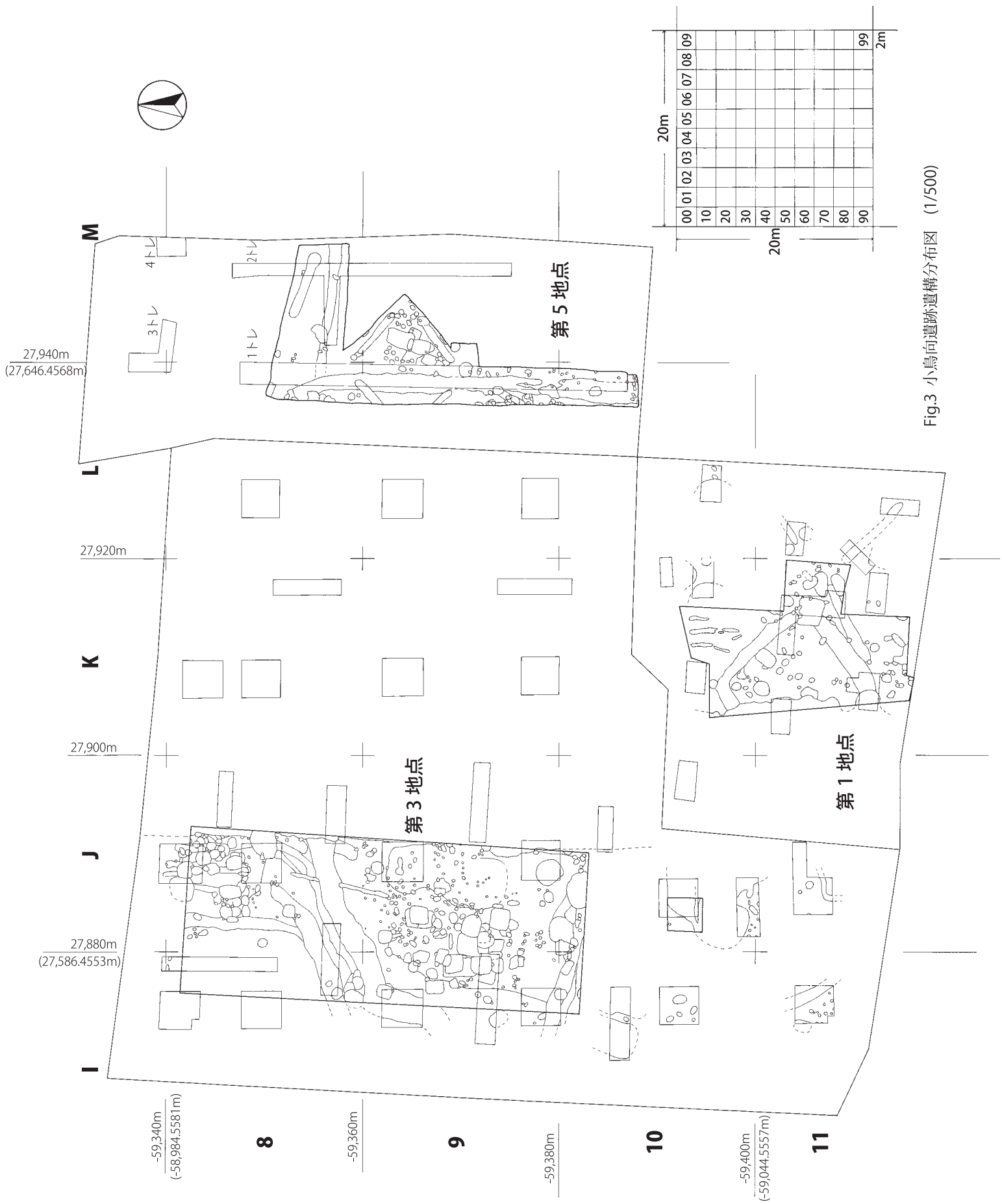


Fig.3 小島向遺跡遺構分布図 (1/500)

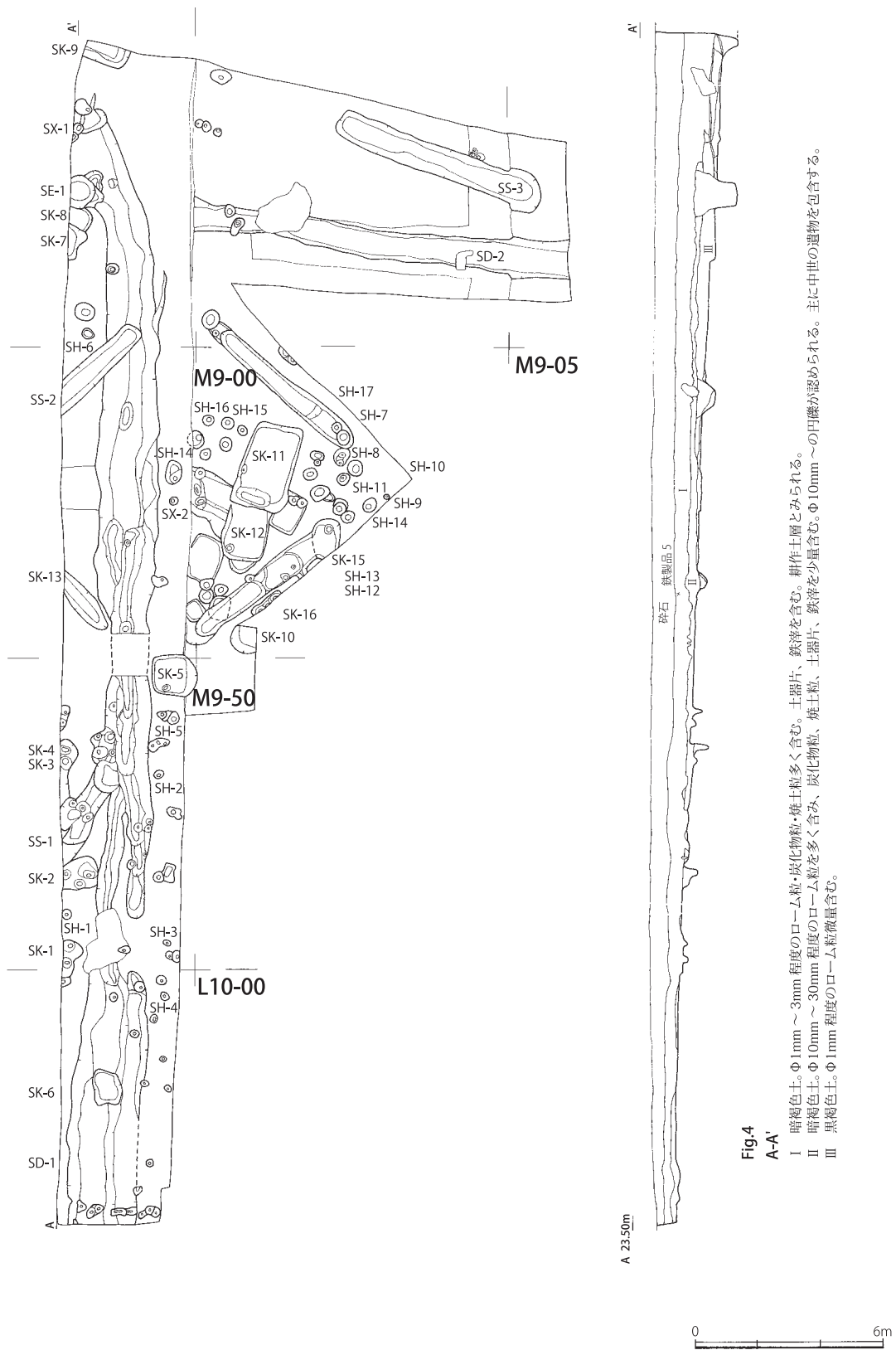


Fig.4
A-A'

I 暗褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒・炭化物粒・焼土粒多く含む。土器片、鉄滓を含む。耕作土層とみられる。
 II 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含む。炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm～の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。
 III 黒褐色土。Φ1mm程度のローム粒微量含む。

Fig.4 小鳥向遺跡第5地点全体図 (1/200)

溝墓のそれと近似することから、近い時期であると想定した。いずれも時期を確定する遺物は皆無であるが、周溝の形態から宮ノ台期としておく。

方形周溝墓

SS-1 (Fig.5・6・9、PL.1)

L9-78周辺に位置する。南東側周溝のみを検出している。平面形は四隅が切れ、周溝部中央付近の外側への膨らみは皆無である。北東側周溝はSS-2の南西側周溝を共有するとみられる。周溝幅は確認面で0.62m、深さ0.17mで底面はローム層内で完結している。主体部を検出していないため周溝墓と断定はできない。遺構に伴う遺物は皆無であった。

SS-2 (Fig. 5・6、PL.1)

L9-29周辺に位置する。周溝は西側隅周辺以外を検出している。SS-1の北東側周溝を共有する可能性がある。四隅が切れ、周溝部中央付近の外側への膨らみは皆無で直線的である。対向する溝は僅かに並行関係には無く、全体としてやや歪んだ方形を呈する。主体部は検出していない。南東側と北東側の周溝中央部は両端部より一段低くなっているが、埋葬痕跡は認められない。周溝幅は中央部で0.7m～0.8m、深さは0.26m～0.56mで底はローム層内で完結している。規模はSS-1の北東側周溝を共有するものとして、10.4m×9.6mを測る。遺構に伴う遺物は皆無であった。

SS-3 (Fig.5・7、PL.1・2)

M8-63周辺に位置する。直線状の溝1条の検出であるが、その位置及び覆土の状況から他2基の周溝墓と時期の近い周溝墓と判断した。周溝部中央付近の外側への膨らみは皆無かつ直線的で、底部はほぼ同レベルであり、周溝内の埋葬痕跡は認められない。断面形は底部・壁面共に緩やかに内湾した逆台形を呈し深さは0.29m、掘り込みはローム層内で完結している。遺構に伴う遺物は皆無であった。

土坑

SK-9 (Fig.10、PL.1)

L8-58に位置する。一部の検出であるが、長方形を呈するとみられる。規模は検出部分で1.44m×0.64m、深さ0.51mを測る。底面はローム層・粘質土層より下層の砂質土層まで掘り込んでいる。出土遺物は皆無である。

2 中世の遺構と遺物

この時代の遺構は土坑15基、溝状遺構2条、ピット群である。

土坑

SK-1 (Fig.8)

L9-98に位置する。一部の検出で、不整楕円形を呈する。明瞭な切り合いは無い。規模は1.30m×0.74m、深さ0.28mを測る。底面は凹凸が激しい。実測遺物は無い。

SK-2 (Fig.9)

L9-88に位置する。不整楕円形を呈し東側でSD-1と接する。規模は1.13m×0.98m、深さ0.54mを測る。底面は窪みが多く平坦ではない。断面形も安定しない。実測遺物は無い。

SK-3・4 (Fig.9、PL.1)

L9-68に位置する。ともに一部の検出であり全体像は不明である。SK-3は方形を呈するが、壁面は法面状に傾斜している。SK-4は不整楕円形を呈する。切り合いは不明瞭で1遺構の可能性もある。規

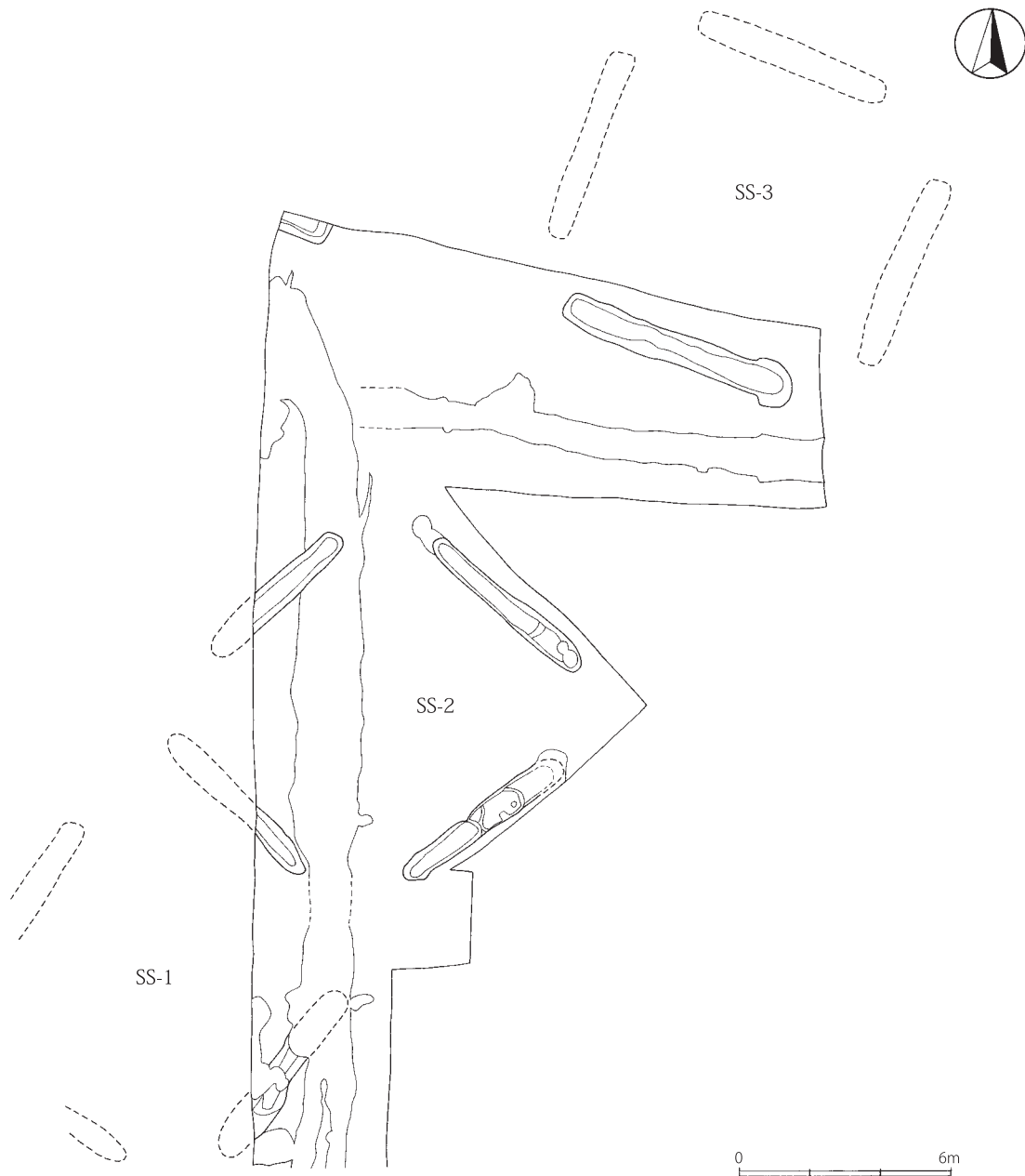


Fig.5 SS-1・2・3 全体図 (1/200)

模はSK-3が0.97m×0.25m、深さ0.18m、SK-4が1.00m×0.56m、深さ0.64mを測る。実測遺物はSK-4覆土中から1のカワラケが出土している。

SK-5 (Fig.9、PL.1)

L9-59に位置する。方形を呈するが、東辺が外側に張り出す。切り合いは無い。規模は1.42m×1.28m、深さ0.42mを測る。底面は平坦で南側中央寄りに深さ0.18mのピットが1箇所認められる。掘り込みはローム内で完結している。実測遺物は無い。

SK-6 (Fig.8、PL.1)

L10-18に位置する。不整形を呈し、規模は1.10m×0.87m、深さ0.24mを測る。底面は平坦に近く土坑二つが連結した形状を呈し、掘り込みはローム層を掘り抜き粘質土まで達している。実測遺物は無い。

SK-7 (Fig.10)

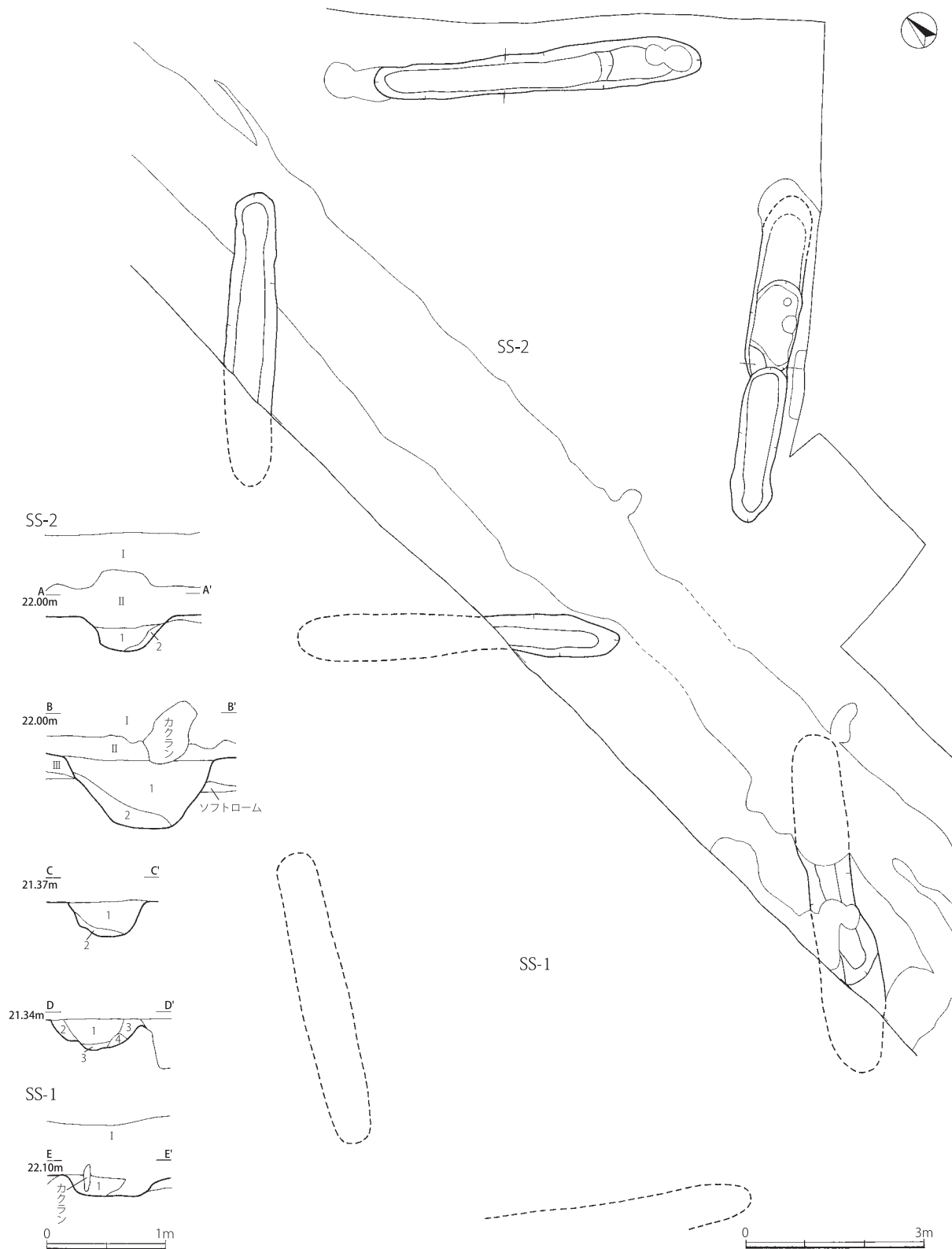


Fig.6

A-A'

- I 暗褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒・炭化物粒・焼土粒多く含む。土器片、鉄滓を含む。耕作土層とみられる。
- II 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含む、炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm程度の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。
- 1 黒褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒微量含む。
- 2 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。

B-B'

- I 暗褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒・炭化物粒・焼土粒多く含む。土器片、鉄滓を含む。耕作土層とみられる。
- II 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含む、炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm程度の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。
- III 黒褐色土。Φ1mm程度のローム粒微量含む。
- 1 黒褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒微量含む。
- 2 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。

C-C'

- 1 黒褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒微量含む。
- 2 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。

D-D'

- 1 黒褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒微量含む。
- 2 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。
- 3 暗褐色土。ソフトローム主体。ややしまる。
- 4 暗褐色土。Φ10mm程度のローム粒を少量含む。

E-E'

- I 暗褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒・炭化物粒・焼土粒多く含む。土器片、鉄滓を含む。耕作土層とみられる。
- 1 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。

Fig.6 SS-1・2 平面図・断面図 (1/100・1/50)

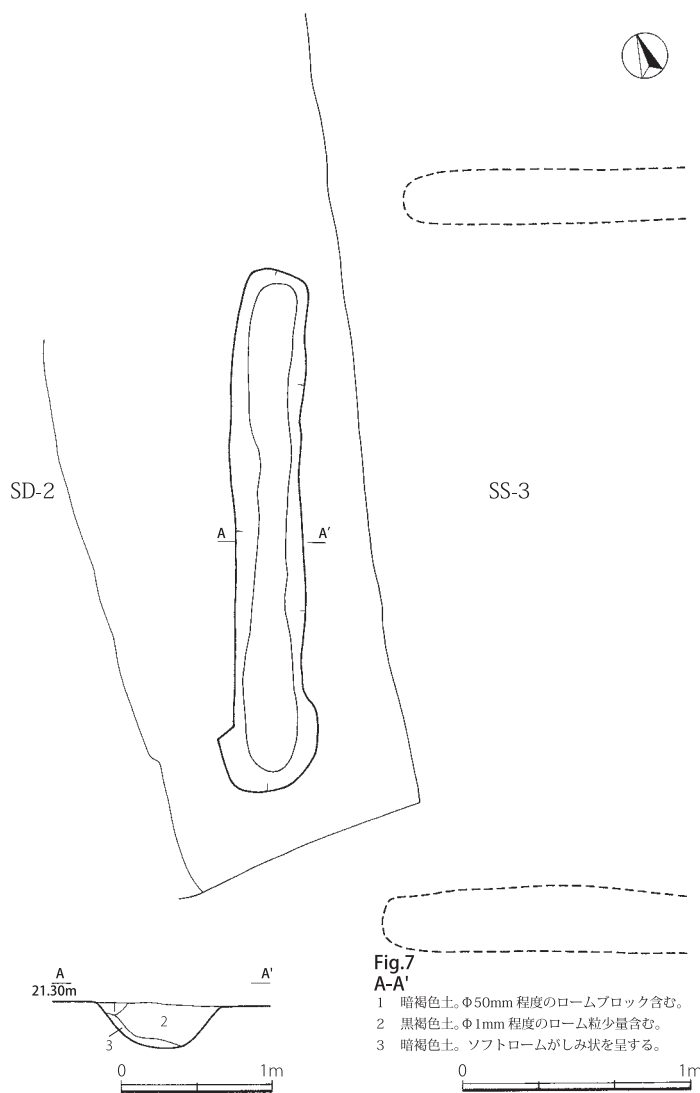


Fig.7 SS-3 平面図・断面図 (1/100・1/50)

L8-88に位置する。一部の検出であるが方形を呈し、北側でSK-8遺構と切り合い本遺構が新しい。規模は1.18m×0.65m、深さ0.18mを測る。底面は平坦で掘り込みはローム層中で完結する。実測遺物は無い。

SK-8 (Fig.10)

L8-78に位置する。一部の検出であるが方形を呈し北側でSE-1と、南側でSK-7と切り合う。本遺構が両者より古い。規模は0.76m×0.65m、深さ0.09mを測る。底面は平坦で掘り込みはローム層中で完結する。実測遺物は無い。

SK-10 (Fig.9、PL.1)

M9-40に位置する。一部の検出であるが不整楕円形を呈し、切り合いは無い。規模は1.03m×1.00m、深さ0.36mを測る。底面は僅かに窪んで壁に向かって緩やかに立ち上がっている。掘り込みはローム層中で完結する。実測遺物は無い。

SK-11 (Fig.12、PL.1・2)

M9-11に位置する。方形を呈し南側でSK-12・14、SX-2と切り合う。覆土の様子から新旧関係の判断は出来ない。規模は2.65m×1.75m、深さ0.29mを測る。底面は比較的平坦で、壁付近で緩やかに立ち上がってゆく。南側で長楕円形の掘り込みが認められ、深さ0.09mを測る。ピットは西側で検出したが、0.05mと極めて浅い。出土遺物は1・2はカワラケで覆土中から、3は頁岩製の長方硯で南壁際付近から、4・5は銅銭で南側掘り込み上方の遺構覆土上位から出土した。4は「元寶」で5は判読不能。

SK-12 (Fig.12、PL.2)

M9-20に位置する。方形を呈し、北側でSK-11、西側でSX-2と切り合うが新旧関係は不明。南側で半円形で棚状の張り出しを持つが、別遺構の可能性もある。規模は張り出しを含めずに1.75m×1.50m、深さ0.21mを測る。底面は比較的平坦で壁は緩やかに立ち上がるが、東側は垂直近くにまでなる。南西側隅に深さ0.20mのピットを持つ。1～4は銅銭で1～3は「開元通寶」、4は「平元寶」である。何れも南側ピット周辺の底面からやや浮いたレベルで出土した。

SK-13 (Fig.12・14、PL.2)

M9-30に位置する。不整長方形を呈し東側でSK-12に接する。規模は1.43m×1.04m、深さ0.21mを

Fig.8

A-A'

- 1 暗褐色土。Φ1mm~3mm程度のローム粒・炭化物粒・焼土粒多く含む。土器片、鉄滓を含む。耕作土層とみられる。
- 1 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。

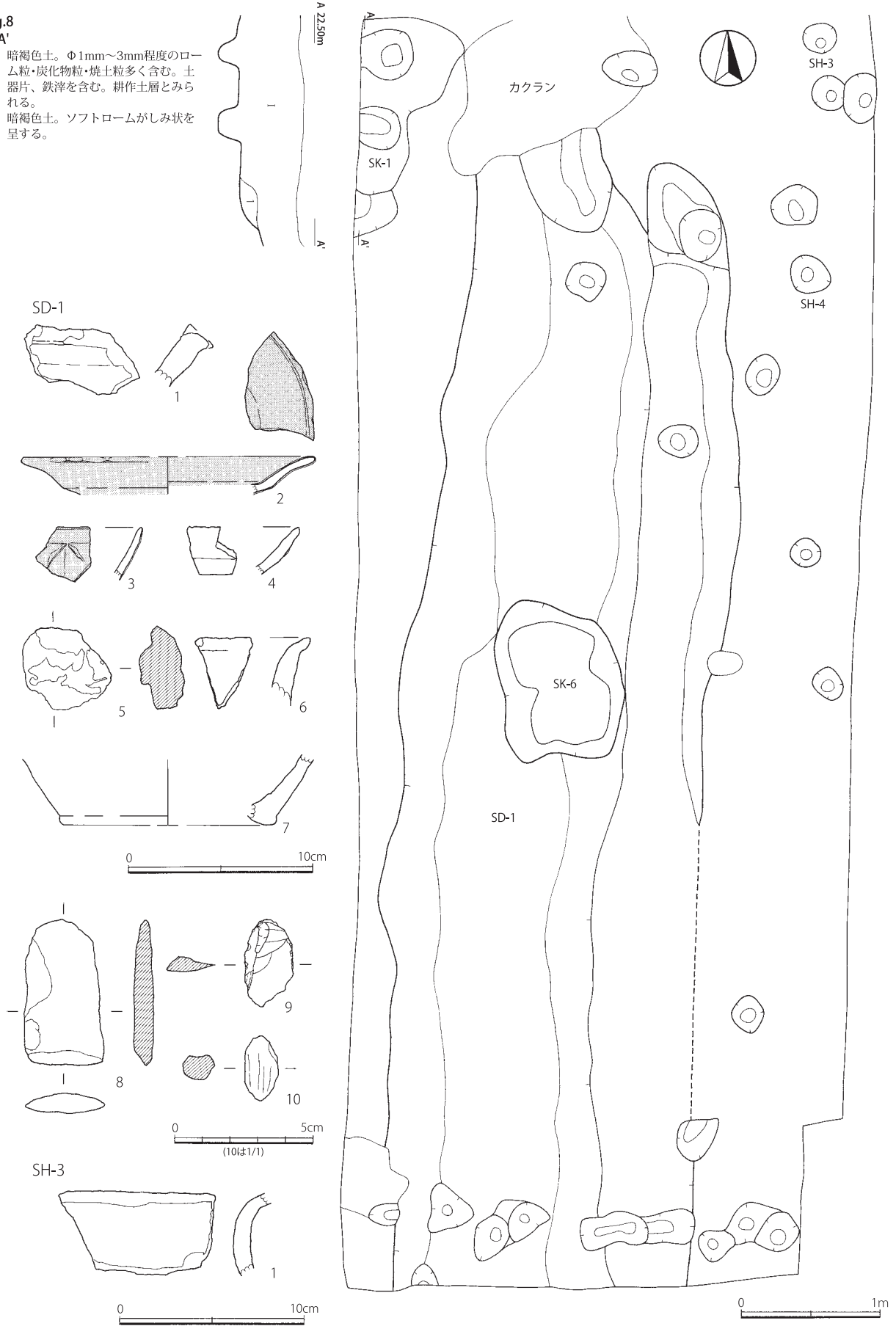


Fig.8 A-1 区遺構平面図・断面図 (1/40)、遺物実測図

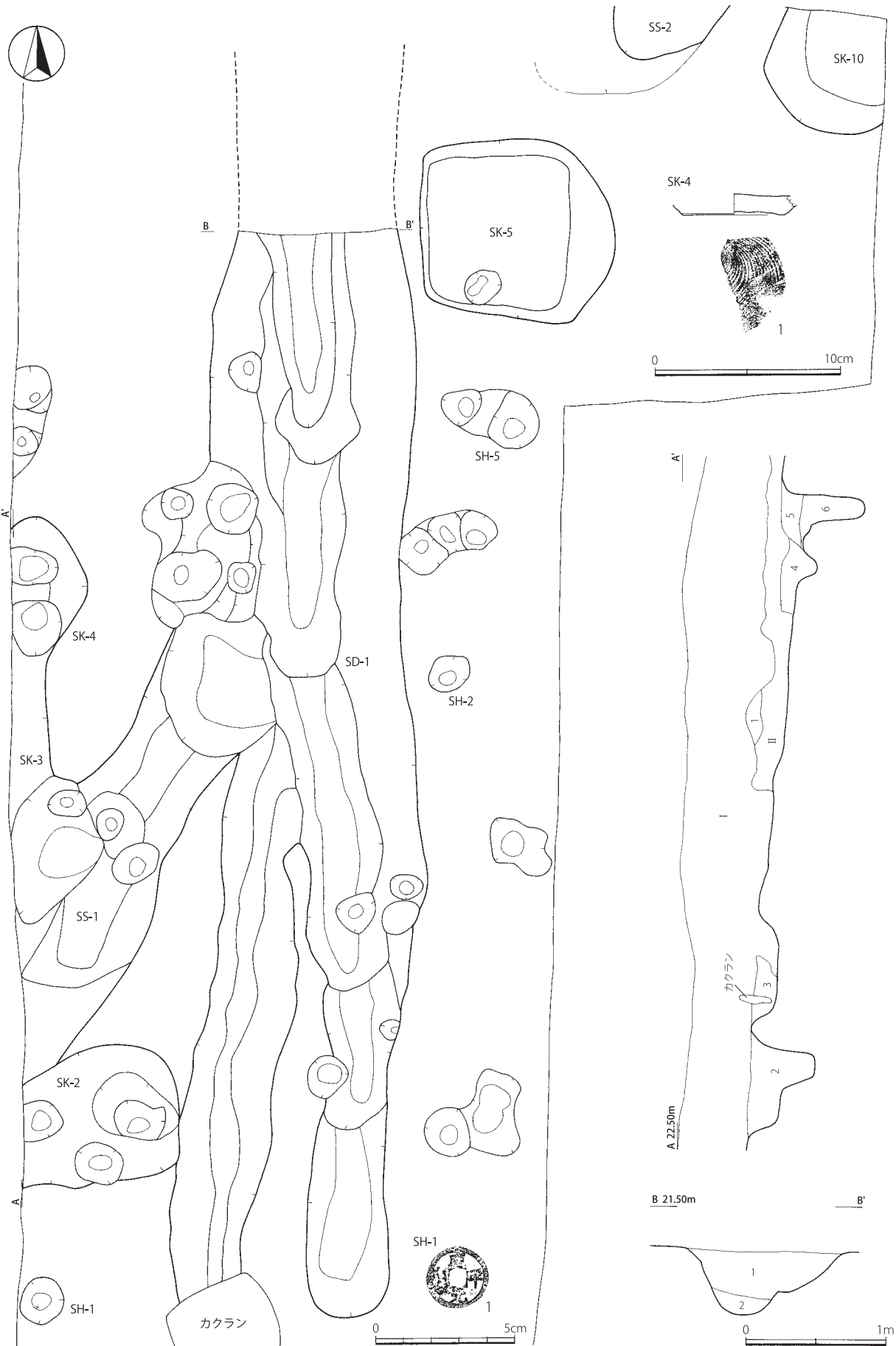


Fig.9 A-2 区遺構平面図・断面図 (1/40)、遺物実測図

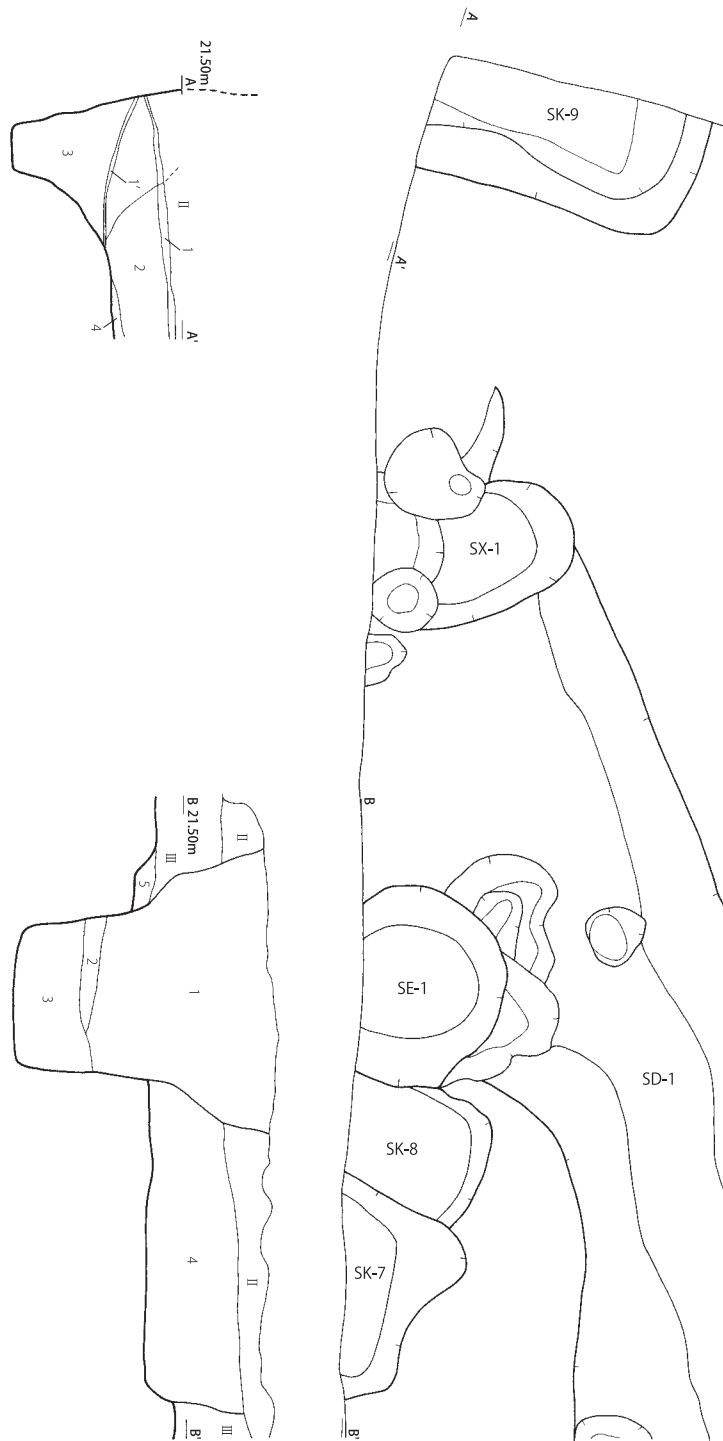


Fig.10
A-A' 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含む。炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm～の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。

- II 酸化鉄層固く締まる。
- 1' 酸化鉄層固く締まる。1層に比べやや密度が高い。
- 2 黒褐色土。Φ3mm～5mm程度の褐色粒多く含む。褐色粒は酸化鉄様を呈する。
- 3 黒褐色土。Φ1mm程度のローム粒微量含む。
- 4 黒褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒微量含む。

- B-B' 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含む。炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm～の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。
- II 黒褐色土。Φ1mm程度のローム粒微量含む。
- III 暗褐色土。Φ5mm～10mm程度のローム粒を多く含む。
- 1 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土。Φ3mm～5mm程度のローム粒微量含む。
- 3 暗褐色土。Φ3mm～5mm程度のローム粒微量含む。
- 4 暗褐色土。焼土粒・炭化物粒少量含む。
- 5 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。

Fig.10 A-3区遺構平面図・断面図 (1/40)

Fig.9
A-A'

- I 暗褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒・炭化物粒・焼土粒多く含む。土器片、鉄滓を含む。耕作土層とみられる。
- II 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含む。炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm～の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。
- 1 黒褐色土。Φ3mm～5mm程度のローム粒微量含む。
- 2 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のロームブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。
- 4 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈し、やや締まる。
- 5 暗褐色土。ソフトロームがしみ状を呈する。
- 6 暗褐色土。Φ3mm～5mmのローム粒少量含む。

B-B'

- 1 暗褐色土。やや砂質土混じる。焼土粒・炭化物粒少量含む。Φ10mm程度の浅黄褐色粒を微量含む。鉛滓を包含する。
- 2 暗褐色土。Φ20mm程度のローム粒を多く含む。

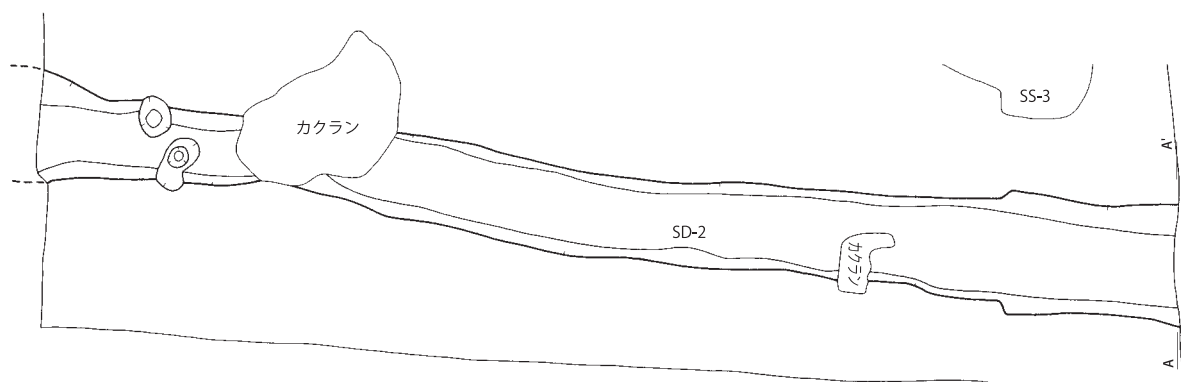


Fig.11

A-A'

II 暗褐色土。Φ10mm～30mm程度のローム粒を多く含み、炭化物粒、焼土粒、土器片、鉄滓を少量含む。Φ10mm程度の円礫が認められる。主に中世の遺物を包含する。

1 ロームブロック。

2 黒褐色土。Φ1mm～3mm程度のローム粒微量含む。

3 暗褐色土。Φ20mm程度のローム粒多く含む。

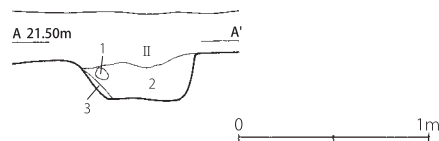


Fig.11 SD-2 平面図・断面図 (1/40)

測る。底面は比較的平坦。鉄製品2 (Fig.14) はヤリガンナとみられるが、刃部の観察では形状に不明瞭な点があり、断定は出来ない。茎を欠損している。覆土からやや浮いたレベルで出土した。

SK-14 (Fig.12、PL.2)

M9-21に位置する。長方形を呈し西側でSK-11と切り合うが新旧関係は不明。規模は1.27m×0.90m、深さ0.11mを測る。底面は比較的平坦。北側のピットは本遺構に伴うか不明。覆土はSK-11・12と極めて近似する。鑄造関連遺物11 (Fig.14) は濃緑色滓で覆土上層から出土した。

SK-15 (Fig.12・13、PL.1・2・3)

M9-32に位置する。隅丸方形を呈し、西側でSS-2を切る。南側で浅い掘り込みと切り合うが、調査区境界で不明瞭である。規模は1.27m×0.89m、深さ0.25mを測る。底面は比較的平坦で、壁にかけて緩やかに立ち上がる。北側のピットは深さ0.25mを測る。1は常滑甕片を使った転用砥石である。

SK-16 (Fig.12、PL.2)

M9-41に位置する。一部の検出であるが方形を呈するとみられる。規模は検出部分で1.14m×0.22m、深さ0.4mを測る。底面はピットが複数あるように凹凸が激しい。

井戸

SE-1 (Fig.10、PL.2)

L8-78に位置する。円形を呈し、規模は1.06m×0.77m、深さ0.69mを測る。南側でSK-8、SD-1と切り合い、本遺構が新しい。底部は砂層に達しており、調査時においては水が湧き出る状態であった。覆土は極めて単調であり、短時間の埋没が想定される。実測遺物は無い。

ピット

SH-1～SH-17 (Fig.4・8・9・12、Tab.1、PL.1・2)

大きく2群に分けることが出来る。調査区南側～中央L9-89周辺のSH-1～SH-5を含む一群、拡張区M9-11周辺のSH-7～SH-17を含む一群であり、調査区南端の列状を呈するもの以外は何れも規則性に

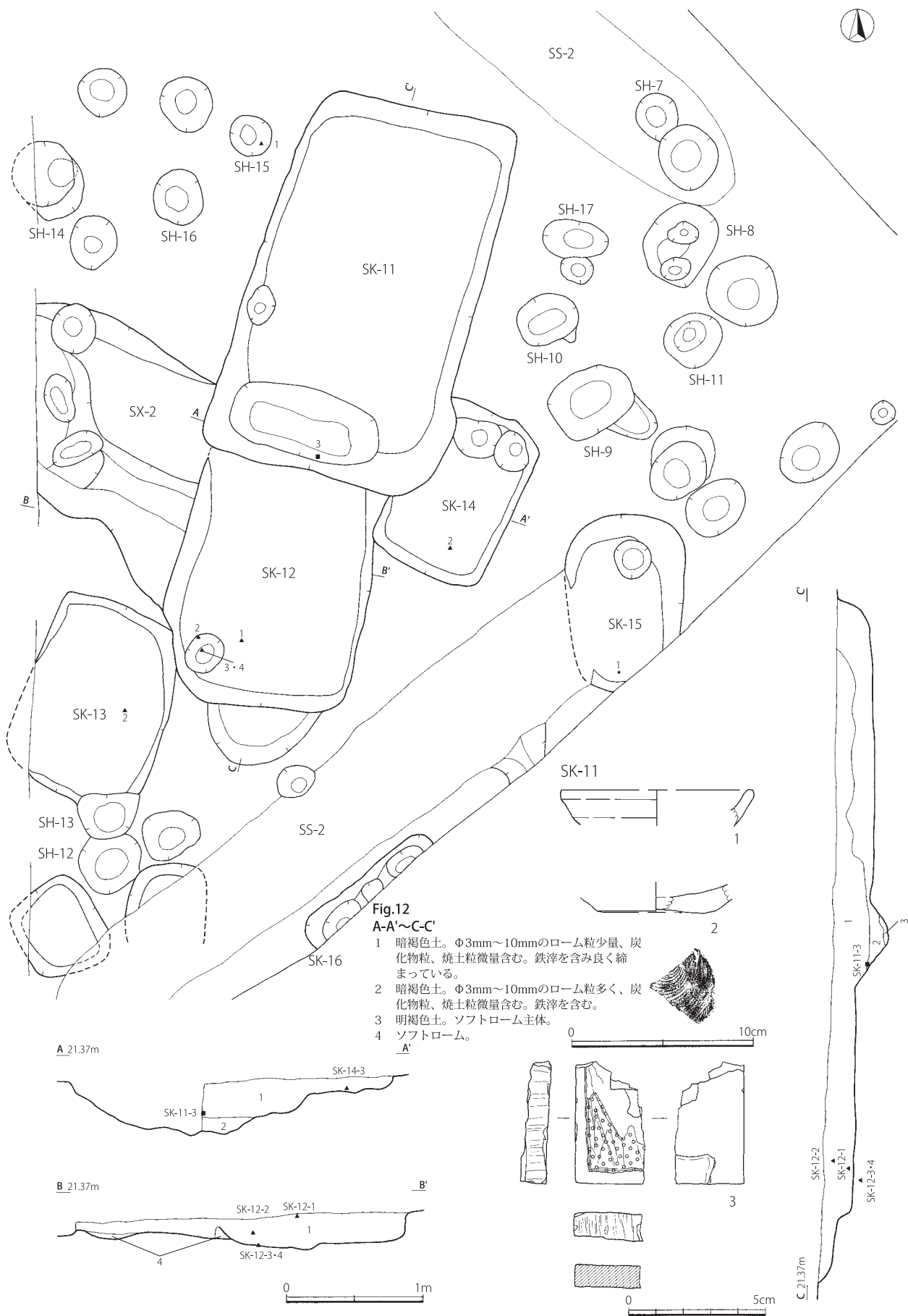


Fig.12 B区遺構平面図・断面図（1/40）、遺物実測図

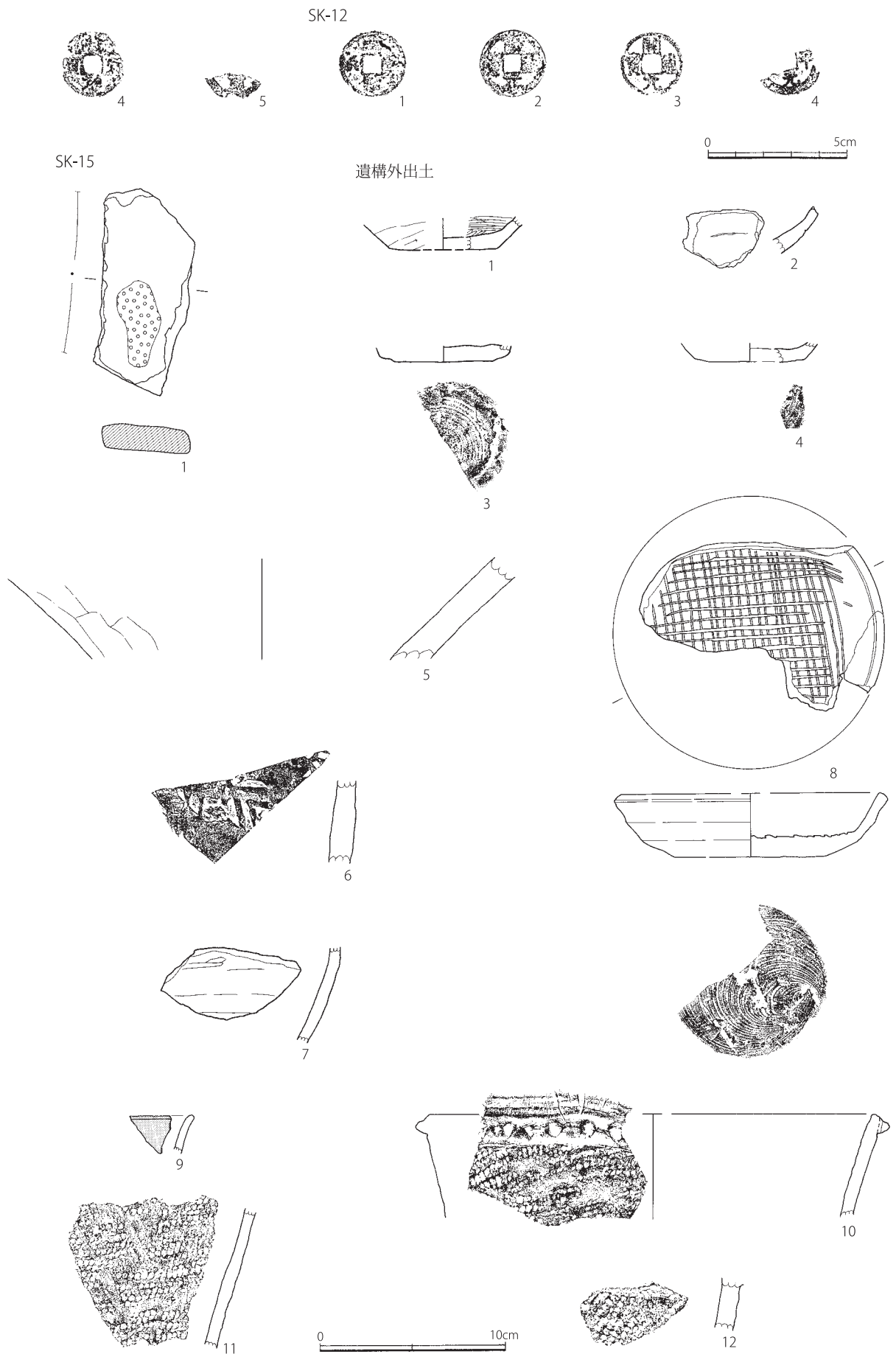
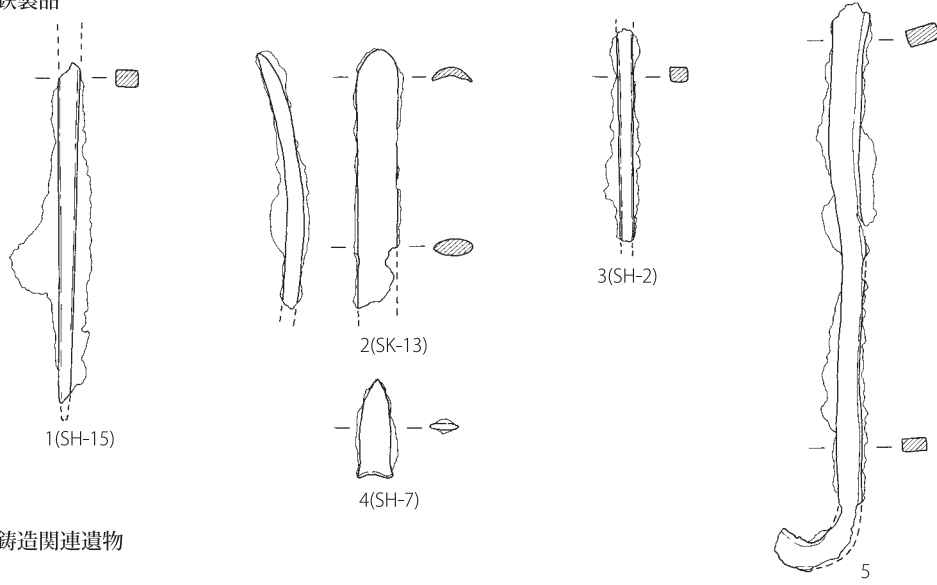


Fig.13 SK-11・12・15、遺構外出土遺物実測図

鉄製品



鑄造関連遺物

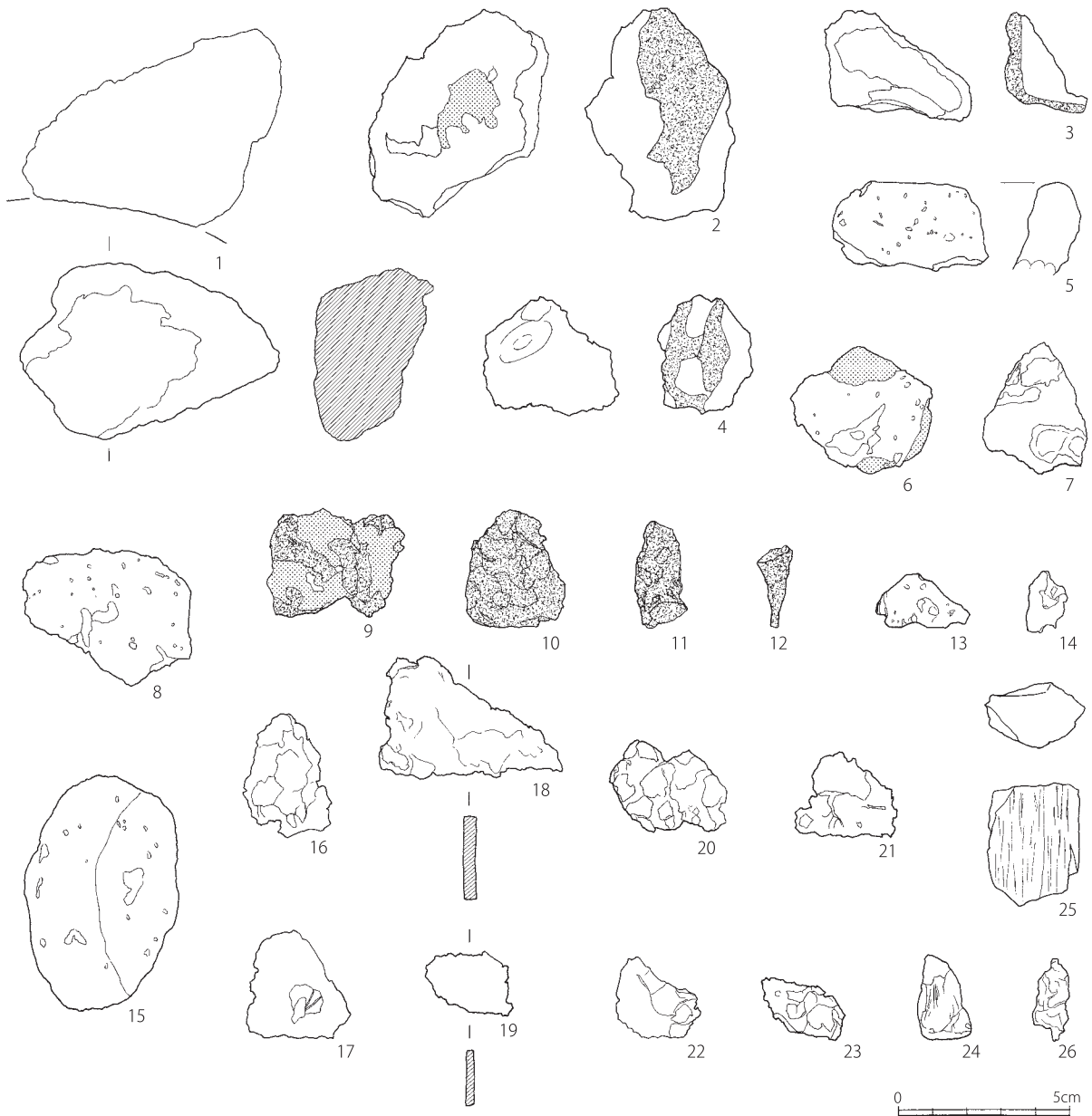


Fig.14 鉄製品・鑄造関連遺物実測図

乏しく、その性格を復元し難いが、その位置関係や覆土に方形土坑との関連性が考えられる。遺物はSH-1の底部から1の「咸平元寶」が、SH-3の覆土中からは渥美の広口壺片が出土している。

溝

SD-1 (Fig.4・8・9、PL.1・2)

L8-68からL10-38に位置する。一部の検出であるが幅2.18m～1.14m、長さ35.41mを測る。ほぼ南北方向に伸びるが、北端で西側に曲がる様相をみせる。しかも本遺構延長線上にあたる調査区壁面黒色土中に幅広の掘り込みが認められることから、ここで二又に別れている可能性が高い。南端では、2本の溝として認識できるが、近年の攪乱により、その新旧関係は不明である。断面形は底部が丸く、壁との境界を明瞭に持たず内湾しつつ開く。底面レベルは南から北へ傾斜しており、調査区内で0.98mの高低差を持つ。実測遺物は1が常滑産陶器捏鉢、2は龍泉窯系の青磁稜花皿、3は龍泉窯系の青磁碗、4は古瀬戸皿類、5は不明土製品で、粘土を搾り出したような形状を呈する。6は渥美片口鉢、7は灰釉陶器瓶類か、8は石材不明の打製石斧、9は黒曜石であるがツールであるか不明、10は樹種不明の炭化種子である。他に、覆土中には0.5g～203.6gの円礫が5.5kg含まれていた。

SD-2 (Fig.11、PL.2)

M8-70から85に位置する。一部の検出であるが幅0.60m～0.43m、長さ6.11mを測る。東から西にむかって高低差0.31mで傾斜し、西端で掘り込みが浅くなる。SD-1との交差点付近及び調査区西側断面ではプランは確認できない。このため、新旧関係は明確ではないが、覆土が中世の遺物を含む遺構とは明確に異なり均質であることから、中世以前の遺構であるとしておく。断面形は底部は極めて平坦で、壁との境界を持ち、直線的に放射状に開く。時期を判別する遺物の出土は認められない。

不明遺構

SX-1 (Fig.10)

L8-68に位置する。平面形は不整形で1.08m×1.05m、深さ0.09mを測る。南側でSD-1と切り合うが、新旧関係は不明。覆土中に鑄造関連遺物が周辺より集中して出土した。

SX-2 (Fig.12、PL.2)

M9-20に位置する。平面形は不整形で1.56m×1.35m、深さ0.13mを測る。東側でSK-11・12と切り合うが、新旧関係は不明。

遺構外 (Fig.13、PL.3)

遺構外出土の遺物は、確認調査時のトレンチ内出土遺物や本調査時に遺構確認面より上層から出土した遺物及び、遺構内から出土したが明らかに時期が異なるものを主体とする。1は古墳時代前期の土師器壺底部か、2は土師器坏、3・4はカワラケ、5は常滑陶器片口鉢、6は渥美陶器甕か、7は瀬戸美濃陶器平碗、8は古瀬戸中期様式卸皿、9は龍泉窯系青磁碗、10～12は加曾利B式粗製深鉢で、同一個体とみられる。

第3節 鑄造関連遺物

鑄造関連遺物としては10種に分類した。炉壁や鉄製品などは更に細分類が可能だが、担当の能力的な問題と総量が1,339.4gと少ないことから大枠の分類とした。以下分類別に出土状況を記す。

炉壁 総量424.3gで、鑄造関連遺物中に占める割合は31.7%。出土遺構はSS-1周溝（おそらく周溝を

掘り込んだ中世のピットとみられる)や、SD-1で全体の82%を占める。他はSH-6の18%である。

羽口 総量2.3gで個体数1。鑄造関連遺物中に占める割合は0.2%。調査区全体の取り上げ遺物である。

濃緑色滓 総量403.1gで、鑄造関連遺物中に占める割合は30.1%。出土遺構としては、SD-1から131.3g、33%が、土坑ではSK-2・4・11・12・13・14・16から138.0g、34%が、中でもSK-11・12が突出する。ピットではSH-5～8、10・14・16・17から30.3g、7%が、他にSX-1から20.4g、5%である。

白色滓 総量13.1gで、鑄造関連遺物中に占める割合は1.0%。出土遺構はSD-1から11.6g、89%が、SK-12・14から1.5g、11%である。

鑄型 総量72.6gで、鑄造関連遺物中に占める割合は5.4%。出土遺構はSD-1から69.6g、96%が、他にSH-17から3.0g、4%である。

被熱石 総量5gで、鑄造関連遺物中に占める割合は0.4%。出土遺構は確認調査時の1トレンチから5g、1個体である。おそらくSD-1に伴うものと思われる。

鉄塊系遺物 総量275gで、鑄造関連遺物中に占める割合は20.5%。出土遺構は土坑ではSK-11・12・14・15・16から174.2g、63%が、SX-1から32.1g、11%が、ピットではSH-5・7・8・10・13・17から、23.7g、9%が、溝からはSD-1から18.0g、7%が、方形周溝墓ではSS-2周溝(周溝を掘り込むピット)から13.7g、5%が、確認調査時の1・4トレンチから13.3g、5%である。

鉄製品 総量126gで、鑄造関連遺物中に占める割合は9.4%。出土遺構は土坑ではSK-11～14から35.6g、27%が、溝ではSD-1から24.7g、20%が、ピットではSH-2・7・15から20.3g、16%が、SX-1から6.1g、5%が、方形周溝墓ではSS-2周溝(周溝を掘り込むピット)から2.0g、2%が、その他遺跡全体の取り上げ遺物から37.3g、30%である。

黒鉛化木炭 総量4gで、鑄造関連遺物中に占める割合は0.3%。出土遺構は土坑ではSK-11・14から1.9g、48%が、溝ではSD-1から1.6g、40%が、ピットではSH-10から0.5g、12%である。

木炭 総量14gで、鑄造関連遺物中に占める割合は1.0%。出土遺構は土坑ではSK-4・11から6.8g、49%が、確認調査時の2トレンチから5.2g、37%が、SX-1から2g、14%である。

これまでの調査に比べ鑄造関連遺物の組成比には差異が認められるが、遺物種としては各種揃っていることが判る。それよりも1㎡あたりの出土量に最大の特徴がある。第5地点が4.7gであるのに対し、第1地点39.4g、第3地点31.9gと比べて格段に少ない。また、炉壁の個別重量だけ見ても、これまででは200g以上の遺物が複数認められ、最高500gを超えるものもあったが、今回の調査では100gを超えるものが1点しか認められない。つまり、鑄造関連遺物の分布密度が希薄であり、かつ個体重量が軽量なのである。この現象については、今回の調査地点がこれまでの調査地点よりも操業エリアから離れていることを意味すると評価しておく。また、第4地点(Fig2、小川2008)の成果では鑄造関連遺物の分布は極めて希薄であることが判っており、第5地点の西側に操業エリアのひとつがあることを示唆するともいえる。

第3章 総 括

各遺構について簡単にふれておきたい。

方形周溝墓 調査区内で3基を検出したが、このことで第1地点の確認調査範囲において古墳時代前期より古いとした不明溝が2基の周溝墓である可能性が高まった。叶台遺跡では弥生時代中期後半の住居跡を確認しており、これに対応した墓域であるとみられる。一定期間の定住を意味するものであろうか。

土坑 平面形が方形のものと不整形のものに大別されるが、時期の決定可能な遺物は無い。

溝 南北方向と東西方向の2条であるが、時期はSD-1が青磁稜花皿の時期から15世紀前半とすれば、第3地点85号遺構に繋がる可能性がある。SD-2については覆土中に鑄造関連遺物が皆無であることから中世よりは遡る時期の所産であろう。

ピット 2群に分けることが出来るが、分布状況や覆土の内容から方形土坑の時期に近いものが多数を占めるとみられる。遺物は12世紀後半のものが認められるが遺構時期の決定は早計と考える。

不明遺構 覆土の内容が方形土坑に近似し、鑄造関連遺物を包含するため同時期である可能性がある。

これまでの調査成果からは、明確な鑄物師操業の場が検出されておらず、その時期を明確にすることは困難である。また、今回の整理においても鑄造関連遺物を含む遺構の時期は12世紀後半から15世紀前半に及ぶことが判ったが、この期間を操業期間と見做すには問題は多い。現状では、称名寺文書の示す1338（建武5）年に鑄物師免と呼ばれる免田があったという史実を踏まえ、操業以降の掘り込みには鑄造関連遺物が入り込んでいる可能性が高いという理解を重視したい。とすれば、関連遺物を含む最も古い段階のものが操業に近い時期といえ、また、それ以降は操業と直接関係がない二次的な堆積の可能性もあることを考慮すべきであろう。このことは長期的な操業を否定するものではない。

【参考文献】

北見一弘 1999「新堀小鳥向遺跡『平成10年度市原市内発掘調査報告』市原市教育委員会

” 2000『市原市小鳥向遺跡』財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第69集

” 2003「新堀小鳥向遺跡第2地点」『市原市文化財センター年俵 平成12年度』

櫻井敦史 2002『市原市小鳥向遺跡』財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第77集

小川浩一 2008「小鳥向遺跡第4地点」『市原市市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第7集

牧野光隆 2010『市原市小ノ台遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第15集

Tab.2 遺物観察表

掲載番号	種別	遺構種	注記番号	掲載番号2	重量(g)	出土高(m)	遺構底高	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
SS 1	炉壁	方形周溝墓	SS1-1	構造5・SS-1-1	11.5	一括		4.55	2.6	1.5	7.5YR5/2灰褐色 破片
SS 1	炉壁	方形周溝墓	SS1-1		13.9						
SS 2	縄文	方形周溝墓	SS-2d-3	遺構外10	55.2	20.965	20.785m				加曽利B式粗製深鉢 破片 口径(23.8)cm 5YR5/4にぶい赤褐色 黄褐色極小粒多く含む 口縁部に突帯を巡らせた後指頭による押圧を施す。口縁内面には浅い沈線がめぐる。体 部単節LR施文後斜方向に弱い条線が認められる。体部内面は斜方向～縦方向のヘラミカ キ。
SS 2	縄文	方形周溝墓	SS-2d-2	遺構外11	53.9	21.037	20.765m				加曽利B式粗製深鉢 破片 5YR5/4にぶい赤褐色 黄褐色極小粒多く含む 体部単節LR施 文後斜方向に弱い条線が認められる。体部内面は斜方向～縦方向のヘラミカキ。
SS 2	縄文	方形周溝墓	SS-2a-1	遺構外12	23.5	一括					加曽利B式粗製深鉢 破片 10YR5/3にぶい黄褐色 黄褐色極小粒多く含む 体部単節LR施 文後斜方向に弱い条線が認められる。体部内面は斜方向～縦方向のヘラミカキ。
SS 2	青磁	方形周溝墓	SS-2d-1	遺構外9	2.2	一括		3.6	2.62	1.53	龍泉窯系青磁碗 破片 7.5YG6/1緑灰色 口径(8.4)cm 白色極小粒少量含む 内外面施釉 10YR5/3にぶい黄褐色
SS 2	鉄器	方形周溝墓	SS-2c-1	構造16・SS-2-1	13.7	-					
SS 2	鉄器	方形周溝墓	SS-2d-1		2						
SS 3	常滑?	方形周溝墓	SS-3-2		24.7						
SK 2	鉄滓	土坑	SK-2-1		1.2						
SK 2	濃緑色滓	土坑	SK-2-1		7.4						
SK 4	1 カワラケ	土坑	SK-4-1		25.9	一括					遺存度 3/1 底径(5.6)cm 10YR7/4にぶい黄褐色 赤褐色・黒色・半透明極小粒多く含む。 底部回転系切り無調整 ミコミナ子無し。
SK 4	木炭	土坑	SK-4-1	構造25・SK-4-2	6.3	一括		3.6	2.75	1.9	樹種不明
SK 4	濃緑色滓	土坑	SK-4-1		0.3						
SK 4	鉄滓	土坑	SK-4-1		1.2						
SK 11	1 カワラケ	土坑	SK-11a-1		3.1	一括					遺存度 破片 口径(10.4)cm 10YR6/4にぶい黄褐色 黄褐色極小粒微量含む 遺存度 1/4 底径(6.4)cm 10YR4/2灰黄褐色 黄褐色極小粒微量含む 底部回転系切り無 調整
SK 11	2 カワラケ	土坑	SK-11a-1		16.8	一括					
SK 11	3 硯	土坑	SK-11a-2		16.3	20.93	20.84m	4.45	2.55	1.15	遺存度 破片 5Y4/1灰色 石材不明 破片資料で長方碑とみられる。側面は垂直に立ち上 り、平滑に整形されているが、短軸方向に擦痕が認められる。上面は一部擦り面が依存 し、放射状に条線が認められる。縁帯がめぐるが、擦り面との段差に乏しく表面が荒いこ とから、二次的な整形を行っている可能性もある。背面は表面が荒く、2次的な整形も考え られるが、本来の整形面であれば、尻側に脚状の突起部位が認められる。表面の条線から は砥石への転用も想定される。
SK 11	濃緑色滓	土坑	SK-11a-1	構造10・SK-11-6	15.1	一括		3.4	2.9	2.15	2.5GY4/1暗オリーブ灰色 表面に鉄錆びが付着している。破面が2面以上認められる。
SK 11	鉄塊系遺物	土坑	SK-11a-1	構造17・SK-11-7	35	一括		3.15	3.05	2.35	不整形。メタル度 10YR5/6黄褐色
SK 11	鉄製品	土坑	SK-11a-1	構造22・SK-11-8	8.4	一括		2.45	2.4	1.45	7.5YR4/3褐色 鉄塊系遺物の可能性あり。破面2面。亀甲状のクラックが認められる。
SK 11	黒鉛花木炭	土坑	SK-11a-1	構造26・SK-11-9	1.4	一括		2.4	1.1	0.95	鉄錆びが付着 10YR4/3にぶい黄褐色
SK 11	4 銭	土坑	SK-11a-1		1.2	一括		21.80mm(2.35)cm	21.70mm(2.2)cm	1.32mm	「元裏」
SK 11	5 銭	土坑	SK-11a-1		0.4	一括		8.51mm(0.9)cm	20.03mm (2.0)cm	1.37mm	「 」
SK 11	砥石	土坑	SK-11a-1		1						
SK 11	鉄製品	土坑	SK-11a-1		0.6						
SK 11	炭	土坑	SK-11a-1		0.5						
SK 11	濃緑色滓	土坑	SK-11a-1		62.3						
SK 11	鉄塊系遺物	土坑	SK-11a-1		59.2						
SK 12	濃緑色滓	土坑	SK-11b-1	構造12・SK-12-5	1.5	一括		2.4	1	0.95	2.5GY2/1黒色 外形は漏斗状を呈する。破面2面。ガラス質
SK 12	1 銭	土坑	SK-11b-3	構造14・SK-12-6	0.9	一括		1.8	1.2	1.1	7.5GY8/1 明緑灰色 外形は不整形で表面に鉄錆びが付着。気泡が多く認められる。破面1面
SK 12	2 銭	土坑	SK-11b-2	構造17・SK-12-7	2.2	21.189	20.981m	24.39mm	24.47mm	1.81mm	「開元通寶」 背文字なし
SK 12	3 銭	土坑	SK-11b-5	構造21・SK-12-8	2.2	21.077	20.981m	24.29mm	24.03mm	1.69mm	「開元通寶」 背文字なし
SK 12	4 銭	土坑	SK-11b-4	構造23・SK-12-9	1.6	20.953	20.981m	23.15mm	23.41mm	1.50mm	「開元通寶」 背文字なし
SK 12	鉄塊系遺物	土坑	SK-11b-1		0.6	20.985	20.981m	9.35mm(1.6)cm	21.08mm(2.15)cm	1.49mm	「平元 」
SK 12	鉄製品	土坑	SK-11b-5		4.1						

掲載番号	種別	遺構種	注記番号	掲載番号2	重量(g)	出土高(m)	遺構底高	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備	考
SK 12	濃緑色滓	土坑	SK-11b-5		23.5							
SK 13	鉄製品	土坑	SK-12-2	鉄製品 2	6.7	21.083	21.05m	6.85	1.4	0.25~0.45		ヤリガンナ? 茎部分を欠損。刃部不明瞭のため、別の利器である可能性もあり。
SK 13	濃緑色滓	土坑	SK-12-1		17							
SK 13	鉄製品	土坑	SK-12-1		3.5							
SK 14	濃緑色滓	土坑	SK-13-4	鍛造 1 1・SK-14-1	3.7	-	記載なし	3.1	1.5	1.25		g10 破面2面。ガラス質。
SK 14	鉄製品	土坑	SK-13-3	鍛造 1 8・SK-14-2	12.3	21.121	記載なし	5.35	3.6	0.35~0.4		10YR5/4にぶい黄褐色 板状鉄製品。破片。龜甲状のクラックが認められる
SK 14	濃緑色滓	土坑	SK-13-1		5.5							
SK 14	白色滓	土坑	SK-13-1		0.6							
SK 14	鉄塊系遺物	土坑	SK-13-1		12.3							
SK 14	鉄塊系遺物	土坑	SK-13-2		16							
SK 14	黒鉛化木炭	土坑	SK-13-1		0.5							
SK 15	1 転用砥石	土坑	SK-14-1		32.2	21.181	記載なし	7.4	3.6	0.8~0.9		滲美?種の転用砥石。側面と器表に磨滅痕跡あり。N4/1灰色 灰色極小粒多く含む。
SK 15	鉄塊系遺物	土坑	SK-14-1		0.8							
SK 16	濃緑色滓	土坑	SK-15-1		1.7							
SK 16	鉄塊系遺物	土坑	SK-15-1		4							
SH 1	1 鉄	ピット	SH-1-1		1.8	21.32	21.309m	22.59mm		1.30mm		1 咸平元貢(かんべいげんぼう) 初録998年 北宋
SH 2	鉄製品	ピット	SH-2-1	鉄製品 3	4	一括		5.6	0.45	0.4		棒状鉄製品。両端部欠損。
SH 3	1 常滑	ピット	SH-3-1		58.4	一括						破片 g10 灰色極小粒少量含む。内面横 - 斜方向へラナデ
SH 5	濃緑色滓	ピット	SH-5-1		1.3							
SH 5	鉄塊系遺物	ピット	SH-5-1		5.7							
SH 6	炉壁	ピット	SH-6-1	鍛造 2・SH-6-1	77.9	一括		6.05	5.25	4.05		N3/0暗灰色 ガラス質部位に鉄錆ひ付着。気泡多。
SH 6	濃緑色滓	ピット	SH-6-1		11.3							
SH 7	鉄製品	ピット	SH-7-1	鉄製品 4	1.7	一括		2.6	1.15	0.15		不明鉄製品。鑑状を呈する。 完形?
SH 7	濃緑色滓	ピット	SH-7-1		2.9							
SH 7	鉄塊系遺物	ピット	SH-7-1		3							
SH 8	濃緑色滓	ピット	SH-8-1		2.5							
SH 8	鉄塊系遺物	ピット	SH-8-1		3							
SH 10	濃緑色滓	ピット	SH-10-1		1.5							
SH 10	鉄塊系遺物	ピット	SH-10-1		3.1							
SH 10	黒鉛化木炭	ピット	SK-10-1		0.5							
SH 13	鉄塊系遺物	ピット	SH-13-1		5.9							
SH 14	濃緑色滓	ピット	SH-14-1		1.4							
SH 15	鉄製品	ピット	SH-15-1	鉄製品 1	14.6	21.106	20.887m	8.95	0.6	0.45		棒状鉄製品。両端部欠損。
SH 16	濃緑色滓	ピット	SH-16-1		1.6							
SH 17	濃緑色滓	ピット	SH-17-1		7.8							
SH 17	鉄塊系遺物	ピット	SH-17-1		3							
SH 17	鋳型	ピット	SH-17-1		3							
SD 1	1 常滑	溝跡	SD-1-3c区		38.8	一括						
SD 1	2 青磁	溝跡	SD-1-1a区		15.7	一括						
SD 1	3 青磁	溝跡	SD-1-2b区		5.6	一括						
SD 1	5 土製品不明	溝跡	SD-1-2b区		9.5	一括		3.2	2.95	1.65		破片 7.5Y6/2灰オリーブ 均質 内外面施釉。
SD 1	4 不明	溝跡	SD-1-2b区		6.2	一括						5YR6/6褐色 赤褐色・白色極小粒多く含む。
SD 1	6 不明	溝跡	SD-1-3c区		11.9	一括						10Y6/2オリーブ灰色 灰色極小粒少量
SD 1	7 石器	溝跡	SD-1-3c区		25.1	一括						7.5Y6/1灰色
SD 1	8 石器	溝跡	SD-1-3c区		15.7	一括		5.25	2.85	1.75		10Y7/1灰白色 半透明小粒少量
SD 1	炉壁	溝跡	SD-1-3c区		40.6	一括		4.15	3.7	3.35		Gy-3.5
SD 1	白色滓	溝跡	SD-1-3c区	鍛造 6・SD-1-1	3.2	一括		2.75	1.6	1.1		10Y7/1灰白色 破片
SD 1	鋳型	溝跡	SD-1-2b	鍛造 1 5・SD-1-1 3	64.3	一括		6.9	4.5	3		5YR6/6褐色
SD 1	鉄製品	溝跡	SD-1-2区	鍛造 2 0・SD-1-14	11	一括		2.7	3.45	1.65		10YR5/4にぶい黄褐色 破片
SD 1	鉄製品	溝跡	SD-1-2区	鍛造 2 4・SD-1-16	6.1	一括		2.45	1.6	1.4		7.5YR5/6明褐色
SD 1	鉄製品	溝跡	SD-1-3区	鍛造 2 3・SD-1-15	3.6	一括		2.45	1.8	1.3		破片 7.5YR4/2灰褐色
SD 1	10 種子	溝跡	SD-1-1a区		0.0416	一括		1.2	0.6	0.5		10YR 4/3にぶい黄褐色
SD 1	9 石器	溝跡	SD-1-3c区		2.5	一括		3.1	1.8	0.55		N2/0黒色 破片

掲載番号	種別	遺構種	注記番号	掲載番号2	重量(g)	出土高(m)	遺構底高	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備	考
SD 1	青磁	溝跡	SD-1-2b区		4.6	一括						
SD 1	土製品不明	溝跡	SD-1-2b区		17.8	一括						
SD 1	炉壁	溝跡	SD-1-3c区		17.6	一括						
SD 1	鋳型	溝跡	SD-1-2b区		5.3							
SD 1	濃緑色滓	溝跡	SD-1-1a区		15.7							
SD 1	鉄器	溝跡	SD-1-a区		1.9							
SD 1	鉄塊系遺物	溝跡	SD-1-1b区		2.5							
SD 1	濃緑色滓	溝跡	SD-1-2		35.5							
SD 1	白色滓	溝跡	SD-1-2		8.4							
SD 1	炉壁	溝跡	SD-1-2		62							
SD 1	鉄塊系遺物	溝跡	SD-1-2		3.4							
SD 1	黒鉛化木炭	溝跡	SD-1-2		1.6							
SD 1	濃緑色滓	溝跡	SD-1-3c		79.7							
SD 1	鉄塊系遺物	溝跡	SD-1-3c		12.1							
SD 1	濃緑色滓	溝跡	SD-1-c		0.4							
SD 1	鉄器	溝跡	SD-1-c		2.1							
SD 1	青磁	溝跡	SD-1-3c区		2.3							
SX 1	濃緑色滓	その他	SX-1-1	鑄造9・SX-1-1	20.4	一括		4.05	3.15	2.1	2.5GY4/1暗オリーブ灰色 破片	
SX 1	鉄製品	その他	SX-1-1	鑄造19・SX-1-2	6.1	一括		2.55	1.85	0.25	10YR4/4褐色 破片	
SX 1	鉄塊系遺物	その他	SX-1-1		32.1							
SX 1	木炭	その他	SX-1-1		2							
調査区全体	カワラケ			遺構外4	5.2	-		-	-	-	破片 底径(5.8)cm 10YR7/4にぶい黄褐色 赤褐色 黒色極小粒多く含む。 底部外面回転系切り無調整 底部内面口ク口整形小	
調査区全体	滲美			遺構外6	53.7	21.275		-	-	-	Gy-4.0 破片	
調査区全体	瀬戸			遺構外8	136.6	21.327		-	-	-	遺存度3/1 口径(13.8)cm 最大径17.6cm 器高3.4cm 底径8.1cm 7.5YR7/6橙色 体部内外面施釉 体部下位外面無釉	
調査区全体	瀬戸?			遺構外7	35.6	21.43		-	-	-	7.5Y6/3オリーブ黄 灰色極小粒微量含む	
調査区全体	炉壁			鑄造4	26.1	21.25		3.95	3.5	2.9	5YR4/2灰褐色 破片	
調査区全体	濃緑色滓			鑄造8	36.5	21.465		4.95	4	2.4	10YR5/3にぶい黄褐色	
調査区全体	鉄製品			鉄製品5	28.5	21.591		15.5	2.7	0.35-0.45		
調査区全体	鉄製品			鑄造2.1	8.8	-		3	2.5	1.45	破片 10YR5/4にぶい黄褐色	
1トレ	常滑			遺構外5	89.6			-	-	-	片口鉢 2.5YR6/8橙色	
1トレ	炉壁			鑄造3	20			4.3	3.25	2.4	2.5YR4/4にぶい赤褐色	
2トレ	土師器(古墳)			遺構外1	17.1			-	-	-	壺 底径(5.6)cm 7.5YR6/6橙色 半透明・白色極小粒少量	
2トレ	土師器(古墳)			遺構外2	9.1			-	-	-	坏 10YR7/4にぶい黄褐色 黒色・赤褐色極小粒多く含む	
2トレ	カワラケ			遺構外3	24.0			-	-	-	10YR7/4にぶい黄褐色 黒色・赤褐色極小粒多く含む	
3トレ	炉壁			鑄造7	18.8			3.85	3	1.4	7.5YR5/4にぶい褐色	
3トレ	炉壁			鑄造1	100.9			7.6	5.15	5.8	5YR5/6明赤褐色	



A区遺構確認状況(南から)



A区遺構検出状況(南東から)



A区遺構検出状況(北から)



B区遺構検出状況(東から)



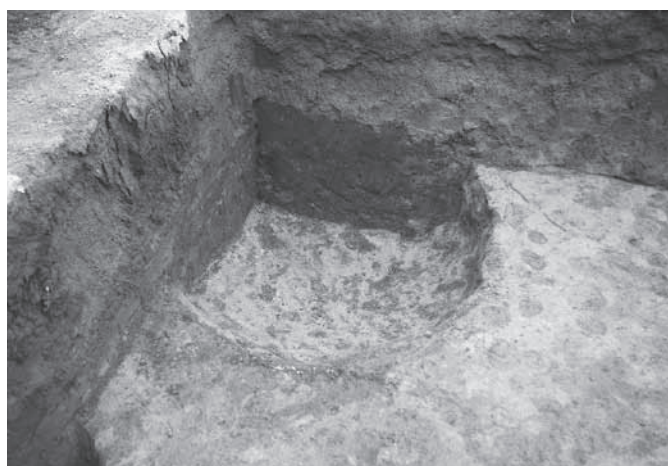
SS-2周溝(北東から)



SK-5(北から)



SK-9(東から)



SK-10(西から)



SK-11 (手前)・12 (奥)



SK-12 銅銭出土状況 (西から)



SK-11 硯出土状況 (西から)



SE-1



SD-1、SK-6 検出状況 (南から)



SS-3、SD-2 検出状況 (西から)

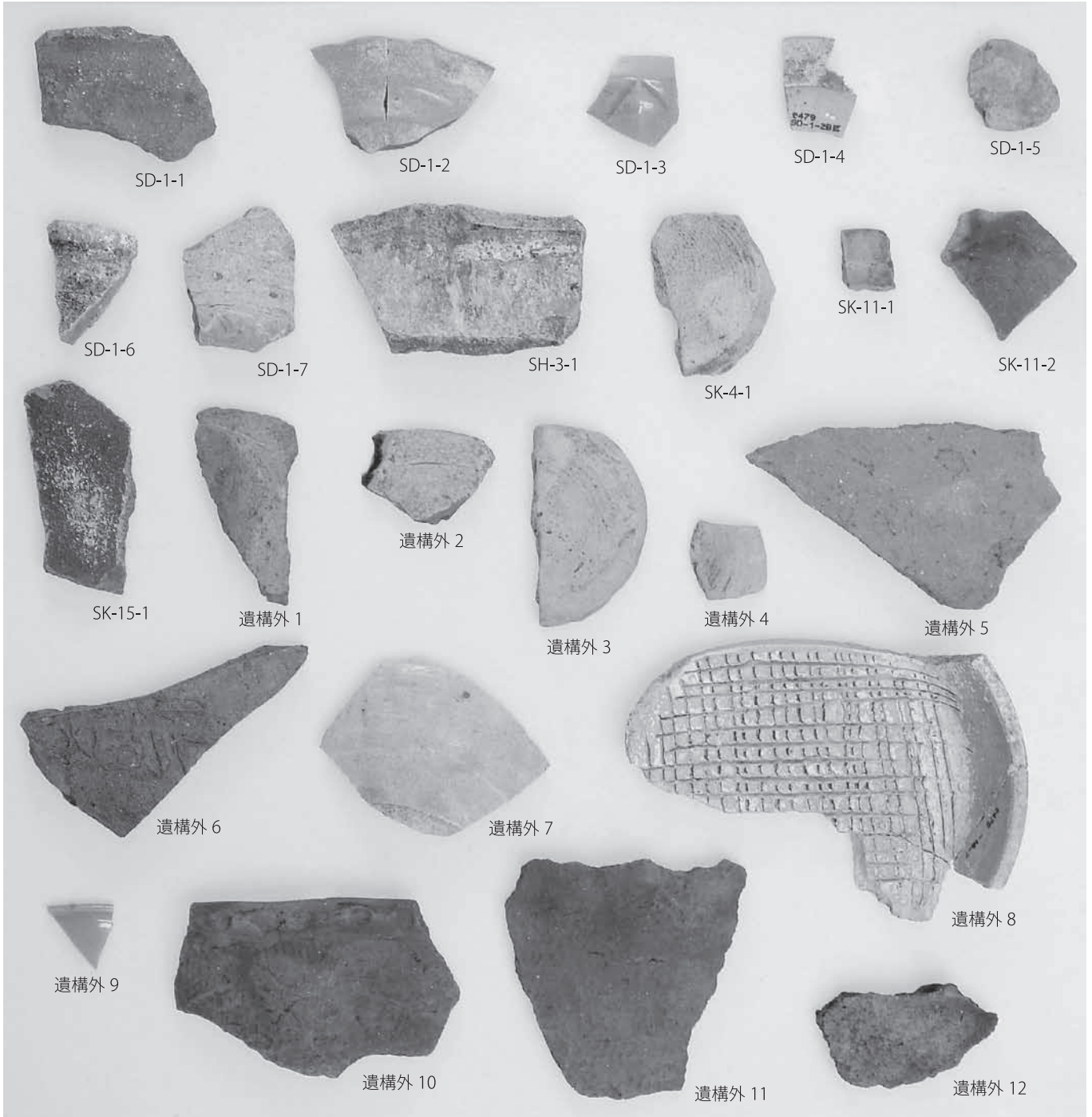


SD-2 断面



調査状況

土器・土製品



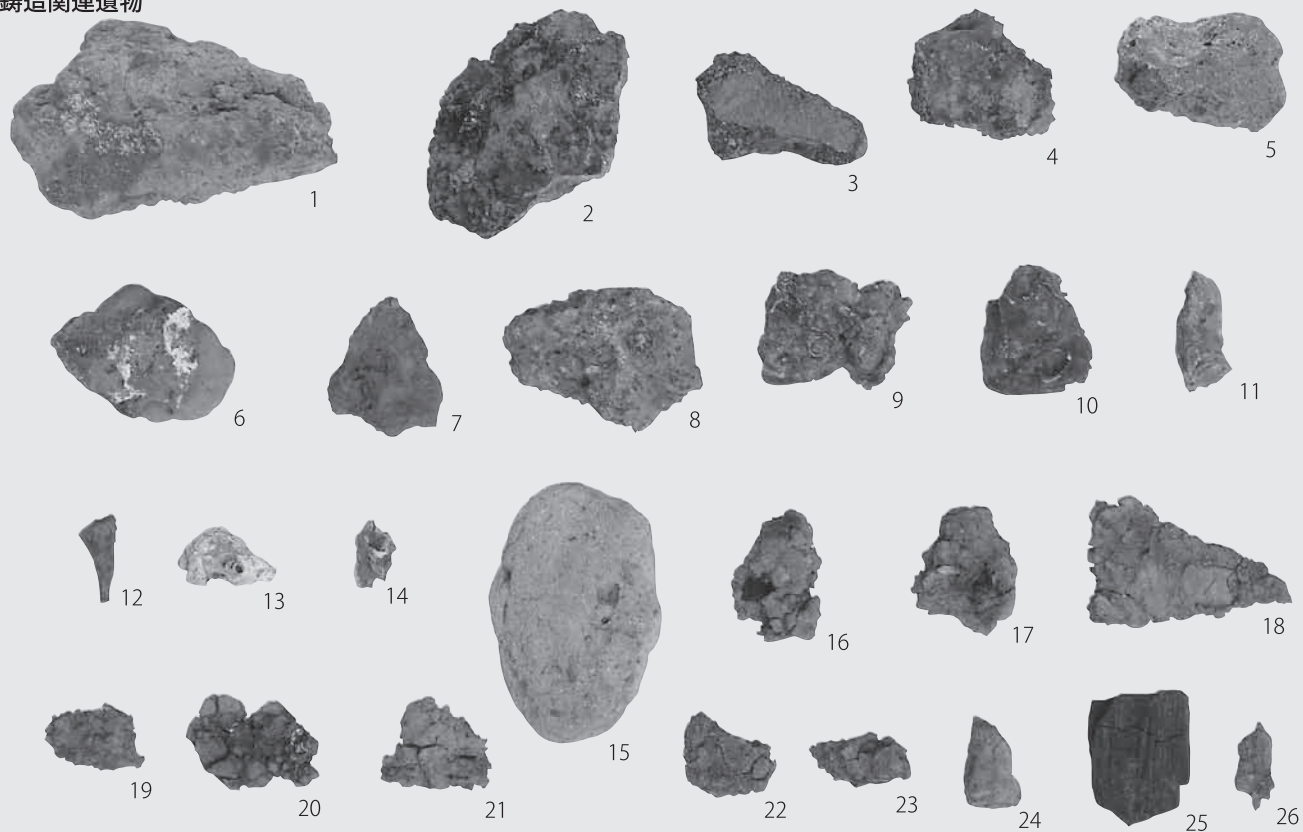
石製品



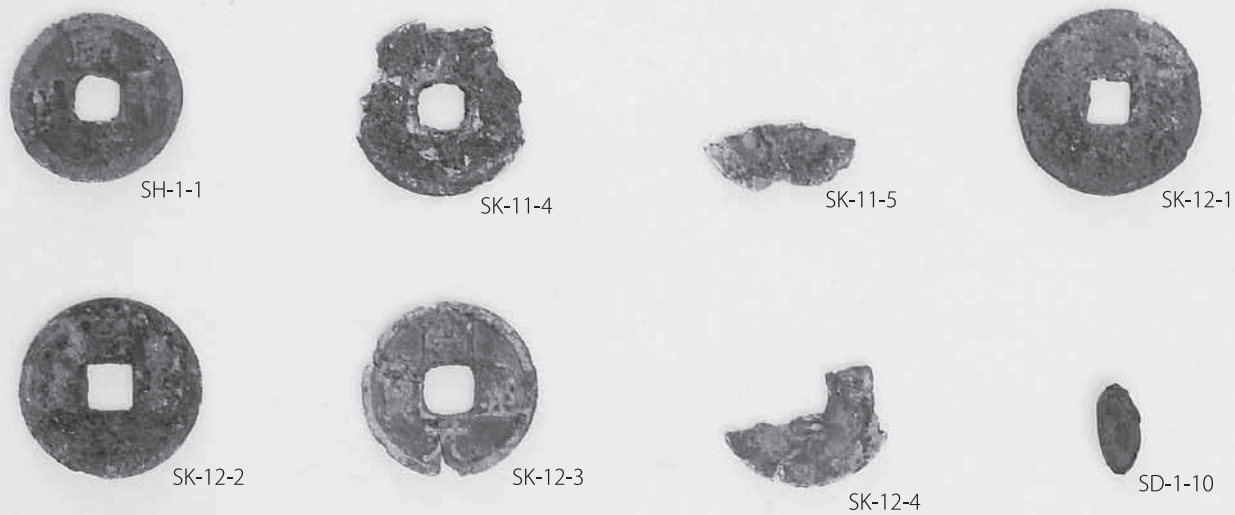
鉄製品



鑄造関連遺物



銭・種子



報告書抄録

ふりがな	いちほらしことりむかいいせき							
書名	市原市小鳥向遺跡Ⅲ							
副書名	小鳥向遺跡第5地点							
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	北見一弘							
編集機関	市原市教育委員会（市原市埋蔵文化財調査センター）							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489 TEL0436(41)9000							
発行年月日	2012年（平成24年）3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いちほらしことりむかいいせき 市原市小鳥向遺跡Ⅲ	いちほらしにいほり 市原市新堀943- 1,944	12219	セ474 セ479	35度 27分 52秒	140度 8分 28秒	2011.5.19～ 2011.6.7	284m ²	特別養護老人 ホーム建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市原市小鳥向遺跡Ⅲ	包蔵地	弥生時代中期	方形周溝墓3基、 土坑1基	中世陶磁器、銭貨、鉄 製品、硯、鑄造関連遺 物（熔解炉炉壁、鉄滓 など）		これまでに見つかって いる中世の鑄造関連遺 物分布範囲が東方に広 がることを確認した。 また、遺跡内では初め て弥生時代中期の墓域 の存在が判明した。		
		中世	土坑15基、溝1 条、井戸1基、 ピット群					
		時期不明	溝1条					
要約	<p>弥生時代中期の方形周溝墓の検出は、叶台遺跡における同時期の集落の墓域である可能性を踏まえれば、集落のあり方についてこれまでの理解を再検討する新たな資料となる。中世については隣接する小鳥向遺跡第1・3地点に関連するとみられる遺構群を確認した。新堀鋳物師操業の場を直接示す遺構の検出は認められなかったものの、鑄造関連遺物出土範囲の東方への広がりを確認した。また、遺物中に縄文時代加曾利B期の遺物含まれており、周辺一帯が縄文時代後期、弥生時代中期、古墳時代前期・後期、平安時代、中世とこれまで認められた時期よりも長期にわたり断続的な土地利用があったことが想定される。</p>							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第23集

市原市小鳥向遺跡Ⅲ

－小鳥向遺跡第5地点－

平成24年3月16日発行

編集発行 市原市教育委員会埋蔵文化財調査センター

住所 市原市能満1489

電話 0436 (41) 9000

印刷 三陽メディア株式会社

住所 千葉市中央区浜野1397

電話 043 (209) 3411